2019 年度　センター試験　国語（現代文）（本試験）　分 析

全体概況

試験時間　　国語全体で 80 分

大問数・解答数	大問数：2 題　　解答数：20 問
難易度の変化（対昨年）	○ 難化　○ やや難化　○変化なし　● やや易化　○ 易化
問題の分量（対昨年）	○ 増加　● 変化なし　○ 減少
出題分野の変化	○ あり　● なし
出題形式の変化	● あり　○ なし
新傾向の問題	○ あり　● なし

総評

評論文は、エッセイ風の文章で比較的読みやすいものであった。文章量は前年より 1 割程度減少した。出題形式については、昨年度は問題文に写真が含まれていたり、生徒の会話文の中の空欄を補充する設問があったりと、今までにない出題形式が見られたが、今年度は、一昨年以前のきわめてオーソドックスな形式に戻った。小説は、戦前（昭和 15 年）発表の私小説が選ばれたが、こちらも読みやすいものであった。小説の一節を出題する形は前年度と同様であった。文章量は前年より若干増えたものの、読解の負担になるほどではなかった。主人公の心の動きを問う設問が多かったが、これも例年の出題傾向に沿ったものであった。

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 1 問	沼野充義 『翻訳をめぐる七つの非実践的な断章』	50 点	ロシア・ポーランド文学の専門家による、翻訳の仕事をめぐるエッセイ風の文章。翻訳には「直訳」してから注をつけるやり方と、近似的な「言い換え」を試みるやり方があり、後者によって「自然」で「こなれた」訳文ができれば、それが一般的にはよい翻訳とされる。しかし、これは本当に正しい翻訳なのか、そもそも正確な翻訳とは何かという言語哲学の問題に行き着くことになり、簡単には決められないと論じている。文章自体は読みやすく、設問もオーソドックスであった。問 5 の内容一致問題の選択肢が生徒の会話文になっているが、これは 2016 年度本試験にも見られた形式で、特に目新しいものとは言えない。
第 2 問	上林暁 『花の精』	50 点	妻が長期にわたって病で入院している主人公の「私」は自宅の庭に茂る月見草を見て慰められていたが、雑草と見誤った庭師にそれを抜かれ、空虚な気持ちでいた。そんな折、月見草がいっぱいに咲いていると聞き、釣りに行く友人と川原に出かけ、妻を思い感傷的になりながらも月見草の群に励まされていくという、主人公の心の移り変わりを描いている。戦前の小説ではあるが、表現が特に古めかしいわけでもないので読みやすく、設問も素直で解きやすい問題であった。

Copyright (C) 2019 Johnan Prep School

2019 年度　センター試験　国語（古典）（本試験）　分 析

全体概況

試験時間　国語全体で 80 分

分野：問題数（解答数）	古文：6 題（8 問）　　漢文：7 題（8 問）
難易度の変化（対昨年）	古文：○ 難化　○ やや難化　●変化なし　○ やや易化　○ 易化 漢文：○ 難化　● やや難化　○変化なし　○ やや易化　○ 易化
問題の分量（対昨年）	古文：○ 増加　　● 変化なし　　○ 減少 漢文：○ 増加　　● 変化なし　　○ 減少
出題分野の変化	古文：● あり　○ なし　／　漢文：● あり　○ なし
出題形式の変化	古文：● あり　○ なし　／　漢文：● あり　○ なし
新傾向の問題	古文：○ あり　● なし　／　漢文：○ あり　● なし

総評

古文は、初めて室町時代の御伽草子から出題された。文章に用いられている語句・文法や文章展開は、標準的なものであり、読みやすかった。設問の難易度も標準的であり、凝った設問もなく解答しやすい出題であった。問 6 では、例年出題される内容一致や文章展開・表現に関する設問ではなく、主役と準主役の人物関係についての設問であった。この形式の出題は初めてであり、とまどった受験生もいたのではないか。しかし、人物の言動をしっかりつかんでおけば、決して難しい問題ではなかった。全体として解答に迷う選択肢がほとんどなく、正答を導きやすい問題であった。

漢文は、中唐の四大詩人である杜甫の詩文についての注釈書からの出典である。数年に一度、漢詩を含んだ文章を出題しているが、あえて漢詩を含んでいない部分を選んで出題しているところに、今年の特徴がある。文章自体は例年と変わらず読みやすかった。しかし、設問は内容理解を問うものが 7 問中 5 問を占め、解答根拠が本文に明示されていないものもあった。したがって、文章が読みやすくても、正答を導きにくく、解答に時間がかかった受験生も多かったと思われる。傍線部だけに注目して読むのではなく、前後の文脈、あるいは文章全体に目を向けることができたかどうか、が得点を左右しただろう。

大問別分析

大問	出題分野・テーマ	配点	コメント
第 3 問	古文『玉水物語』 ※室町時代・御伽草子	50 点	狐が姫君に恋をして、女に化けて近づくという恋物語である。4 段落構成で、主人公の狐の心情の変化や智謀をめぐらす場面ごとに段落が移り変わっていく。問 3 から問 6 まですべての設問が、狐の心情・智謀に関するものである。狐が、本文中で「狐→（化けて）娘→（姫君の侍女）玉水」と変化していることに気付いて、言動・心理を正確につかめるかどうかが鍵である。第1段落は狐の言動・心情、第 2 段落は狐(=娘)と主の女房の関係、第 3・4 段落は狐（＝玉水）と姫君の関係に注目すれば、容易に正答を導くことができた。
第 4 問	漢文『杜詩詳註』 ※清・注釈書	50 点	昨年の 187 字とほぼ同じ 174 字であった。センター試験頻出の句形・句法や重要語句がほとんど用いられておらず、比較的容易に内容をつかむことができる文章である。昨年は段落分けがない文章であったが、本年は「ある人と杜甫の問答→故事の引用→叔母の墓碑銘」という 3 段落構成の文章であり、段落ごとの内容のつながりがつかみにくかった。問 3 から問 7 に関しては、設問同士の解答を関連付けて考えると、正答を導きやすかった。センター試験の特徴であるが、ある設問の解答が他の設問解答のヒントになることがあり、今年は特にその傾向が顕著であった。

Copyright (C) 2019 Johnan Prep School